

## おわりに

TK216型式から208型式の時期、すなわち古墳時代中期中葉の豊島地域。倭王権との密接な関係が推定されている当地域において生じる在来型古墳の縮小化と小方墳の増加に対し、筆者は地域首長の傍系世帯あるいは有力家長と倭王権との新たな連帯意識創出を目的に、進められた葬制を通した「支配」方式の画期であるとの評価をくだした<sup>3)</sup>。

つまり、古墳時代前期以降、断絶していた待兼山丘陵における古墳築造が、中期中葉に小方墳として復活する背景に、筆者は倭王権の関与を想定する。古墳時代中期中葉におけるこの変革が、豊島地域のみならず淀川流域を中心とする大阪湾沿岸地域において進行しているという展望を筆者はもっている。この点に関しては、古墳時代中期初頭から小円墳が卓越する大和盆地における小古墳の伸長との比較検討も不可欠であろう。また、本稿では、具体的な遺物の検討が不十分なまま議論を進めてきたため、演繹的な議論に終始せざるえなかった。これらの具体的な検討については今後の課題として、ひとまず筆を置きたい。

## 注

- (1) 本稿でいう大阪府北部地域とは淀川北岸に所在する大阪府三島郡、高槻市、茨木市、吹田市、豐中市、池田市のことである。
- (2) 本稿では、川西宏幸による円筒埴輪編年史(川西1978)を中期前葉、田辺解二による須恵器編年(田辺1966)におけるTK73型式からTK208型式期を中期中葉、TK23型式からTK47型式期を中期後葉とする。また、中期前葉は前方後円墳墓成(広瀬1992)の5期、中期中葉は6・7期、中期後葉は8期にそれぞれ対応する。
- (3) 桜塚古墳群における円筒埴輪の状況については、清家章氏、柳本照男氏、和田一之輔氏からさまざまご教示いただきました。記して感謝します。
- (4) ただし、埋葬施設数に関しては、弥生時代中期のものではなく後期から庄内期の方形周溝墓との類似性が、京鳴覚により指摘されている(京鳴1997:p.217)。

(5) 古墳時代における最高位の権力者は、考古学的研究においてヤマト政権や畿内政権といった名稱が今日一般的であるが、本稿では佐藤長門の指摘をふまえ倭王権という名稱を用いる(佐藤1998:pp.170-172)。

(6) なお、当地域における埴輪の規格性についての問題は、本報告書考察編において清家章により詳細に検討されている。本稿とあわせて参照されたい。

(7) このような観点にたって、小古墳をみたとき、そこに樹立される埴輪は次のような点で後れた遺物であったといえる。それは、①宮殿を用いることにより造作された生産性の高さ、②外装施設という性格に起因する視覚的効果という点である。

(8) ただし、細川修平は、古墳時代中期の長原古墳群の本質を「(個別の古墳に轄される)個々に〈政治〉的世界の中へ位置していったものではなく、大集団を形成することによって大集団が〈政治〉的存在として作用する」と述べている(細川1988:p.121)。本稿では長原古墳群についての具体的な検討を行っていないので詳しい言及はできない。しかし細川が古墳時代中期にみられる小方墳を、あくまで集団単位での政治的存在とし、「部族連合体中堅」で意図された〈政治〉内容を、「よりストレートに小レギュル共同体にまで浸透することが可能になった」のは後期古墳の段階であると述べている点(細川1988:p.129)は、中期にみられる小方墳と、後期の横穴式石室群集墳との関係を考えるうえで重要な指摘を含んでいる。

## 参考文献

- 天野秀喜・松村隆文 1992 「円筒埴輪 近畿」『古墳時代の研究』9 古墳III 墓誌 雄山閣出版、東京: pp.56-68  
伊賀高弘 1991 「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」『京都府埋蔵文化財調査研究報告第2集 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都: pp.293-308  
石井清司・伊賀高弘・中井美策・八瀬正雄 1989 「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要・上人ヶ平遺跡」『京都府遺跡調査概報』第35冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都: pp.53-84  
石部正志 1975 「古墳文化論・群集小古墳の展開を中心に」『日本史を学ぶ』1 原始・古代 有斐閣、東京: pp.46-62

- 石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史論座』第4巻 学生社、東京: pp.370-402
- 小野山節 1970「五世紀における古墳の風制」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会、岡山: pp.73-83
- 川西玄幸 1978「円筒埴輪統論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、東京: pp.1-70
- 岸本道昭 1989「長原古墳群の歴史的意義」『大阪文化財団記念論集』(創立大阪文化財センター設立15周年記念論集) 大阪文化財センター、大阪: pp.219-236
- 橋田正徳 1993「桜塚古墳群第4次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1992(平成4年)度 豊中市教育委員会、大阪: pp.7-14
- 京鳴 宛 1997「初期群衆の形成過程—河内長原古墳群の被葬者像をもとめて」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会、京都: pp.213-226
- 楠元哲夫 1986「字陀、その占領時代前半期における二、三の問題」『北原古墳』大字町文化財調査報告書第1集 奈良県立橿原考古学研究所、奈良: pp.102-132
- 楠元哲夫 1996「野山方形区画墓群・古墳群の形成過程とその構造とくに古式群集群の理解によせて」『字陀の古墳文化』 楠元哲夫氏追悼著作集刊行会、奈良: pp.119-161
- 小池 寛 1989「上人ヶ平虎跡」『京都府遺跡調査概報』第32号 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都: pp.3-44
- 小池 寛 1991「低墳丘方形墓」小考一用語の概念規定—『京都府埋蔵文化財論集創立10周年記念論』第2集、朝都府埋蔵文化財調査研究センター、京都: pp.309-318
- 小林行雄 1937「大阪府東中南天平塚古墳の発掘」『考古学』第11巻第9号 東京考古学会、東京: pp.422-423
- 小林行雄 1962「狐塚・南天平塚の調査」『大阪府の文化財別冊』大阪府教育委員会、大阪: pp.7-9
- 近藤義郎 1952「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』第1冊 津市市教育委員会、岡山: pp.41-53
- 佐藤長門 1998「後王權の列島支配」『権力と国家と戦争』古代史の論点4 小学館、東京: pp.167-194
- 清水 鶴 1994「桜塚古墳第3次調査(SZK3)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.2 1991、1992年度 豊中市教育委員会、大阪: p.50
- 清家 章 1995「桜塚古墳第5次調査(小塚古墳第1次)」(SZK5)『豊中市埋蔵文化財年報』vol.3 1993年度 豊中市教育委員会、大阪: p.30
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会、岡山: pp.27-48
- 田中晋作 1990「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』122 古代学研究会、京都: pp.28-50
- 田辯昭三 1966「陶邑古窯址群I」 平安学園考古学クラブ、京都
- 都出比呂志 1970「横穴式石室と群集墳の発生」『近畿古代の日本』角川書店、東京: pp.131-144
- 都出比呂志 1986「埴塚」『岩波講座日本考古学』4集落と祭祀 岩波書店、東京: pp.217-267
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系団の継続と断絶」『特集山論叢』史学篇第22号 大阪大学文学部、大阪: pp.1-16
- 都出比呂志 1990「首長系団変動パターン論序説」『古墳時代首長系団変動パターンの比較研究』平成8年度~平成10年度科学研究費補助金(基盤B・一般2)研究結果報告書 大阪大学文学部、大阪: pp.5-16
- 寺澤 黑 1986「方形区画墓群の変遷と構造」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49回 奈良県立橿原考古学研究所、奈良: pp.315-326
- 豊中市教育委員会 1987「攝津豐中大塚古墳」、大阪府中市教育委員会 1988「利倉南遺跡」『文化財ニュース』豊中号 No.9、大阪: p.5
- 長山雅一 1988「長原古墳群の性格について」『古代史論集』(上)、堺書房、東京: pp.9-44
- 野上丈助 1970「攝河原における古墳群の形成とその特質(1)・(2)」『考古学研究』第16巻第3号・第16巻第4号 考古学研究会、岡山: pp.43-72・pp.69-84
- 服部聰志・柳本照男 1980「史跡・大石塚・小石塚保存事業に伴う調査報告」『豊中市埋蔵文化財年報』大阪府教育委員会、大阪
- 服部聰志 1992「櫻塚古墳第1次調査(SZK1)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.1 1989、1990年度 豊中市教育委員会、大阪: pp.45-46
- 広瀬和雄 1984「群集墳研究の課題と方法」『歴史科学』96号 大阪歴史科学協議会、大阪: pp.14-36
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編作」『前方後円墳

- 集成』近畿編 山川出版社、東京：pp.24-26
- 坂 翔 1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 同志社大学考古学シリーズ刊行会、京都：pp.187-199
- 福永伸哉編 1988「待兼山遺跡」II 大阪大学埋蔵文化財調査委員会、大阪
- 藤沢一夫 1961「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1卷 豊中市史編纂委員会：pp.36-101、大阪
- 細川修平 1988「古式群集墳系譜」『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会、京都：pp.105-135
- 森岡秀人・吉村健 1992「槩津」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社、東京：pp.68-74
- 森岡秀人 1990「前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会、大阪：pp.235-268
- 森岡秀人 1995「海浜の古墳—槩津・金津山古墳と打出小櫛古墳について—」『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生の古稀をお祝いする会、東京：pp.143-172
- 前田照男・清水篤 1992「南大平塚第2次(MTZ.2)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.1 1989、1990年度 豊中市教育委員会、大阪：p.96
- 山元 雄 1986「御厨子冢古墳調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1985年度 豊中市教育委員会、大阪：pp.1-22
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34卷第2号 考古学研究会、岡山：pp.44-55
- 和田晴吾 1988「南山城の古墳その概要と現状」『京都地域研究』vol.4 立命館大学人文学科研究所京都地域研究会、京都：pp.2-34
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第5巻 角川書店、東京：pp.325-350
- 和田晴吾 1994「古墳豪族の諸段階と政治的階層構成—五世紀代の首長制的体制に触れつづく」『ヤマト王権と交流の諸軸』古代王権と交流5 名著出版、東京：pp.17-47
- 和田晴吾 1998「古墳時代は国家政體か」『古代史の論点』4 権力と國家と戦争 小学館、東京：pp.141-166

## 2 猪名川左岸域における小古墳の意義

- 塚輪の規格から見た地域支配 -

清 家 章

### I 本稿の目的

**問題の所在** 大阪大学旧医療技術短期大学跡地において待兼山5号墳の存在が明らかとなった。試掘調査という限られた条件の下ではあったが、埴輪をもつ1辺10m程度の方墳である可能性が高いことが判明したのである。寺前直人の分析を参考にすると埴輪の形態から古墳時代中期中葉に属すると考えられる(本報告:p.21)。この待兼山5号墳以外にも待兼山丘陵には複数の古墳が存在していることが大阪大学考古学研究室と埋蔵文化財調査室などの調査により明らかとなっている。

待兼山丘陵では待兼山古墳を端緒として古墳の築造が始まる。待兼山古墳からは唐草文帯四神四獸鏡や腕輪形石製品などが出土し、古墳時代前期後半に位置づけられる。待兼山古墳に引き続いて三角縁神獸鏡と車輪石を出土した御神山古墳が築かれるようである(図116)。しかし、御神山古墳以降、待兼山丘陵には古墳時代前期末葉から中期前葉までの間に、古墳の築造が認められない。この空白期間をおいて古墳時代中期中葉以降に、小規模な古墳が待兼山丘陵に新たに散見されるようになるのである。時期が判明する古墳としては、古墳時代中期中葉から後葉に位置づけられる待兼山3号墳・4号墳・5号墳の存在がある<sup>1)</sup>。このほかにも石塚古墳に伴うとされる埴輪も古墳時代中期に属し、待兼山2号墳と呼ばれる古墳状の高まり周辺からも古墳時代中期末葉から後期初頭の須恵器が採集されている(本報告図3、福永編1988: pp.29-32)。大阪大学石橋団地内はキャンバス造成のため旧地形が大きく損なわれているので、未知の古墳がまだ埋没している可能性は高い。しかし、待兼山丘陵に未知なる古墳が存在したとしても、中期中葉以降に小古墳が展開するという上記のような傾向は基本的に認められるであろう。

なお、この傾向は猪名川左岸の他の地域にも当てはまるようである。利倉南遺跡や蟹池北遺跡でも中期中葉から後葉の小古墳が検出されている(図116・117)。

このように限られた時期においてのみ小古墳が展開する理由は何處に求められるのか。これが本稿で追求する目的の一つである。

待兼山丘陵に小古墳が築かれる一方で、豊中台地の南部で西摂津扇指の大古墳群である桜塚古墳群が造営され、畿統的に首長墳が築かれる。古墳時代中期においては、桜塚古墳群の被葬者は猪名川左岸流域一帯を配下に収めていたと考えられる。待兼山丘陵に点在する小古墳の被葬者は桜塚古墳群の被葬者とはいかななる関係にあるのであろうか。これが第2の検討課題である。

**分析の方法** 待兼山丘陵の小古墳群を考察する材料はきわめて限定されている。正式な調査を経て造構が確認され、墳形や規模が推定できる古墳は待兼山5号墳だけである。残る古墳は、キャンバス造成時あるいは米軍キャンプが設営された時に破壊され、埴輪や須恵器が包含層や造成土から出土しているにすぎない。待兼山丘陵の古墳を分析する材料は埴輪に限定される。

埴輪の有無や規格をもって、古墳間の関係を問う研究がある。その一つがいわゆる埴輪規制論である。増田逸朗は、埼玉における円筒埴輪の大小は、古墳の規模に対応していることを明らかにした(増田1987)。増川の研究を発展的に継承した坂靖は、奈良界とくに馬見丘陵の埴輪を分析し、中期以降小形の埴輪が増加し、古墳の規模・墳形に応じて埴輪の大小が使い分けられているということを明らかにするとともに、帆立貝形古墳や円墳が規制をうけた墳形であるという小野山節の説を援用し(小野山1970)、帆立貝形古墳や円墳に用いられた埴輪自体も規制を

受けた結果であると評価した（坂1988・1994）。こうした墳形・埴輪規模に応じた埴輪の使い分けは、埼玉県・奈良県以外にも存在し、古市古墳群や久津川古墳群、ならびに九州でもそうした現象が見られるという（笠井・吉田1992、鍾方1993、大西2000）。

坂らの分析は、埋葬施設を調査していない古墳間の関係を問うことができる、きわめて有効な視点であると考える。ただ、坂らのいう規制が存在するとしても、その規制を促した主体が明らかにされていない点は課題として残されている<sup>10</sup>。埴輪に規格性が存在し、その大小の使い分けがあったとしても、それが大王権によって作られた規格性なのか、あるいは地域首長が主体となって地域内の「規制」を行っているかでは、地域支配構造の中身がずいぶん異なるからである。

このような視点をもちつつ、本稿では、待兼山丘陵の小古墳から出土した埴輪と桜塚古墳群の埴輪を比較してみることにしよう。そして、他地域でも同様の作業を行い、埴輪の規制なるものが存在するのかどうか、存在するのであればその規制の具体像を想定し、待兼山丘陵の小古墳と桜塚古墳群の関係を問うてみたい。

## II 猪名川左岸流域の首長系譜とその動向

待兼山5号墳と桜塚古墳群の関係をより理解するために、埴輪の比較にはいる前に、待兼山5号墳が位置する猪名川左岸流域の古墳分布と首長系譜の動向について簡単に振り返っておく。

待兼山丘陵のある猪名川左岸域とは、西側を猪名川、東側を千里丘陵、北側に北摺山系が連なり、南は神崎川で閉まれた空間である。現在の行政区画でいえば、箕面市・池田市・豊中市と吹田市の一部を含む。中小河川・丘陵・沖積地という多様な地形がみられる分、地理的境界による地域区分が比較的容易である。この空間の中央に、箕面川と千里川に挟まれた待兼山丘陵域がある。この北側が、現在の池田市・箕面市に相当するエリアであり、これを池田・箕面域と呼ぶことにしよう。また、待兼山丘陵域の南側は、豊中市中・南部に相当するエリアである。

このエリアは、通称豊中台地と呼ばれる中位・低位段丘から構成される台地とその南側に広がる沖積地にさらに細分することができる。

このうち豊中台地の南側に広がる沖積地における古墳の状況は不明な点が多い。残る3つの領域を観察すると、各領域にそれぞれ1つの首長系譜が存在する（図116）。その3つの首長系譜は、それぞれが歴史的に首長墳を営むわけではない。古墳時代を通じて、首長系譜の盛衰ならびに断絶が認められるのである（図117）。

古墳時代前期には、3地域ともにそれぞれ2基の古墳が築造されている。北部の池田・箕面域には、池田茶臼山古墳・姫三堂古墳、中部の待兼山丘陵から千里川右岸までの領域には、待兼山古墳が存在する。また実体は不明であるが、待兼山丘陵の南西端部には倣製三角縁神獸鏡や車輪石を出土した御山山



図116 猪名川左岸域の首長墳と関係遺跡

	千里川以南～豊中台地	待兼山丘陵域	池田・箕面域	その他
前 期 3	大石塚 小石塚		待兼山	北河内白山
4	小石塚	新寺山		第三室
5	丸塚			
6	御殿子塚 狐塚 北天平塚	待兼山3号 新寺山	待兼山15号 宝池北17次 作兼山4号	利倉家1次
7	御殿子塚 狐塚 北天平塚	待兼山3号 新寺山	待兼山15号 宝池北17次 作兼山4号	
8	新免2号			
9	松原6次			
10	新免古墳群	太鼓山古墳群	吉海1号 新免	二子塚
終 末 期				林塚

アミの古墳は時期あるいは地形を確定する根拠が薄い古墳。

左端の数字は「前方後円墳集成」の10期開年（広瀬1992）の各期を示す。

図117 猪名川流域の首長系譜と小古墳

古墳があったとされる。南部の豊中台地には大石塚古墳・小石塚古墳が存在する。

中期になると様相は一変する。池田・箕面域と待兼山丘陵域の首長系譜は途絶え、首長墳は認められない。その一方で、豊中台地には西摂津郡指の大古墳群である桜塚古墳群が展開するようになる。

桜塚古墳群は40数基の古墳から構成される古墳群である。先述の通り、前期には大石塚古墳・小石塚古墳が桜塚古墳群の西部に築造される。中期になると古墳群の東部に場所を移して大塚古墳・御獅子塚古墳・北天平塚古墳・狐塚古墳・南天平塚古墳などの首長墳が継続的に築造される<sup>10)</sup>。

中期後業になると南天平塚古墳を最後に桜塚古墳群では首長墳の築造が途絶える。その後、首長墳と呼ぶべき古墳は、5世紀末葉～6世紀初頭の新免2号墳を経て、池田・箕面域に二子塚古墳・鉢塚古墳

が築造される。

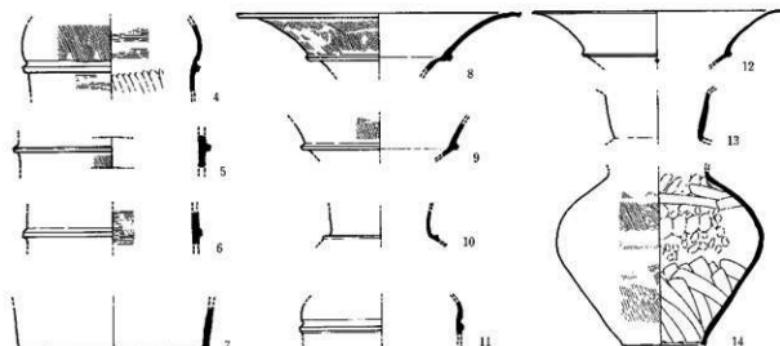
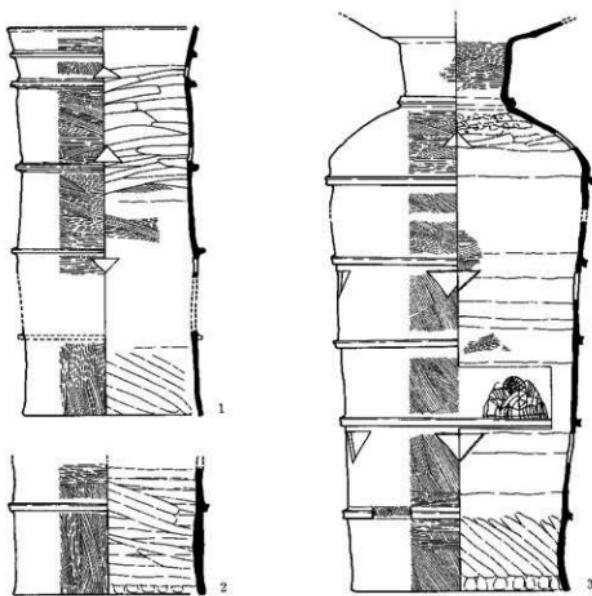
このような首長系譜の動向は、猪名川左岸域に独特な動きではない。京都府乙訓地域の首長系譜を検討した都出比呂志は、地域の盟主的首長墳をだす首長系譜が5世紀前葉・5世紀後葉・6世紀前葉の3つの画期を持って移動することを指摘した。さらにこの盟主墳の断絶は全国的に連動する動向であることを指摘し、各地における盟主墳の移動は大王権力周辺の政治的変動と連動した動きであるとの評価を行った（都出1988）。猪名川左岸における首長墳の盛衰も、都出のいう3つの画期に合致する。都出は、乙訓地域において中期中葉から後葉にかけて盟主的大規模古墳を欠く可能性を指摘しているが、猪名川左岸域でも、5世紀後葉に直径24mの円墳である南天平塚古墳が、末葉には新免古墳群に軋立具形古墳が存在するにすぎず、やはり突出した大規模

墳を欠く。狐塚古墳・北天平塚古墳は南天平塚古墳の前後に位置する首長墳であると考えられる。とくに北天平塚古墳は前方後円墳である可能性も指摘されている（橘田1993）が、たとえ前方後円墳であつたとしても円丘部が20m程度の小規模古墳であると推測され、中期中葉以降に首長墳が縮小化するという傾向は支持される。

### III 桜塚古墳群の埴輪と待兼山5号墳の埴輪

**桜塚古墳群の埴輪** 待兼山5号墳が築造された古墳時代中期においては、盟主の首長墳は桜塚古墳群に築かれる。そこで、まず、桜塚古墳群内における首長墳の埴輪の規格について見てみることにしよう。

先述の通り、桜塚古墳群には多数の古墳がかつて存在した。しかし、多くの古墳は市街化のため消失し、円筒埴輪の段構成を知ることができる資料は、



1~3：大石塚古墳 4~14：小石塚古墳出土埴輪

图118 大石塚古墳・小石塚古墳出土埴輪

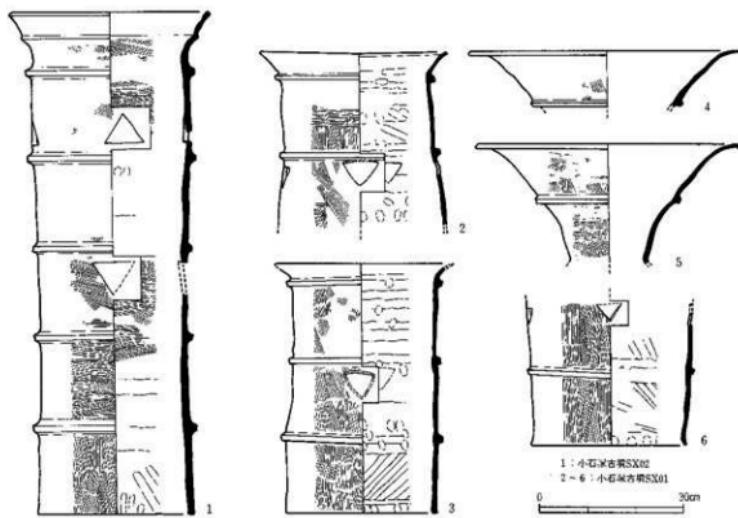


図119 小石塚古墳埴輪棺使用埴輪

大石塚古墳・小石塚古墳・大塚古墳・御厨子塚古墳の各古墳から出土した埴輪しかない。まず、この4古墳の埴輪を検討することにより、前期から中期における桜塚古墳群の埴輪のあり方を知ることにしよう。その後で、部分的な資料の位置づけを図ることとする。

前期古墳に属する埴輪としては、大石塚古墳と小石塚古墳、ならびに両古墳の周囲から検出された埴輪棺に用いられた埴輪がある(図118・図119)。大石塚古墳には、5条突帯の大形円筒埴輪・楕円形埴輪・朝顔形埴輪が用いられる。形象埴輪の破片が若干出土しており、家形埴輪と盾形埴輪ではないかと推測されているが、その量と種類は少ない。

小石塚古墳では壺形埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪の存在が知られる。円筒埴輪で段構成ならびに器高が判明するものはない。ただし、小石塚古墳の周溝外で検出された埴輪棺<sup>⑩</sup>のうち、SX-01という埴輪棺に用いられた3条突帯4段構成の埴輪は小石塚古墳の円筒埴輪に類似し、SX-02に用いられた5条突

帶の埴輪は大石塚古墳の埴輪に類似するという(図119)(岡村はか1988)。この観察に従えば、小石塚古墳に3条突帯4段構成の円筒埴輪も樹立していたことになる。形象埴輪は知られていない。

大石塚古墳と小石塚古墳には隣接する首長墳でありながら、まったく様相の異なる埴輪が用いられている。桜塚古墳群の埴輪を検討した川上雅則はこうした状況を「插座期」と表現する(川上1987)。同一の首長系譜においても、用いられる埴輪の形態が古墳ごとに異なる現象は桜塚古墳群に限ったことではない。高橋克壽はこうした埴輪のあり方から、前期においては墓の造営ごとに埴輪製作集団が組織され、終われば解体されるという一回性の埴輪生産を想定している(高橋1994)。

こうした状況は大塚古墳以降一変する。大塚古墳の円筒埴輪は、底部径16~20cmの間に収まり、器高約45cmの3条突帯4段構成に復元される。突帯と突帯間の間隔は10.5cmを基本とする。最上段突帯から口縁端部までの長さ(口縁部の長さ)も突帯間の間

隔とはほぼ同じである(図120)。

大石塚古墳や小石塚古墳にくらべると、まず著しい縮小化を指摘できる。小石塚古墳SX-02で用いられていた円筒埴輪と同じ3条突帯4段構成の埴輪であっても、直徑・器高ともに縮小化する。器形の点においても、大きく外反する短い口縁は消滅し、直立する口縁が主流となる。形象埴輪の種類が増加することも特筆に値しよう(表2)。

大塚古墳に続く首長墳である御獅子塚古墳からも大量の円筒埴輪が出土している。円筒埴輪の底部径は16~18cmの間に収まり<sup>35</sup>、突帯間の間隔は10.5cmを計る。口縁部の長さも突帯間の間隔とはほぼ同じである。底部径と突帯間の間隔・口縫部の長さは大塚古墳の埴輪とはほぼ同じである。現在のところ段構成が判明する資料はないが、小さな底部径から考えれば3条突帯4段構成か4条突帯5段構成の埴輪であろうと推察される。完全に復元された朝顔形埴輪が1本存在するが、この朝顔形埴輪は、胴部に4条の突帯を有する。大塚古墳の朝顔形埴輪も胴部に4条突帯を有し、円筒埴輪はそれよりも1条少ない3条突帯である。このことから御獅子塚古墳の円筒埴輪も3条突帯4段構成であった可能性がある。この推測が正しいとすると、円筒埴輪の器高は約42cmと見積もることができ、大塚古墳の円筒埴輪とほぼ同規格の埴輪を復元することができる<sup>36</sup>。

北天平塚古墳と南天平塚古墳から出土している埴輪で全容が明らかとなる個体はない。北天平塚古墳

表2 桜塚古墳群と待兼山丘陵の形象埴輪

	家	畜	類	扇	舟	その他
大石塚古墳	○			○		
小石塚古墳						
大塚古墳	○	○		○	○	脚台
御獅子塚古墳		○	○			草花・動物?
北天平塚古墳						
南天平塚古墳						動物、その他の
待兼山3号墳	△	△	○			
待兼山4号墳	△					
待兼山5号墳	△	○				

・現時点では未修理の古墳も含まれている。今後修理作業が進めば形象埴輪の種類が増加する可能性がある。

○…存在が確定なもの。△…存在の可能性があるもの。

で出土した円筒埴輪の底部径は15cm、突帯と突帯の間隔は9.5cm(図120)、南天平塚古墳出土埴輪の底部径は16.2cmである<sup>37</sup>。突帯間の間隔は不明である。こうした小さな底部径を有する円筒埴輪は、やはり3条突帯か4条突帯の埴輪が考えられる。北天平塚古墳・南天平塚古墳が大塚古墳・御獅子塚古墳に続く首長墳であることを考えれば、北天平塚古墳と南天平塚古墳の円筒埴輪も3条突帯4段構成であった可能性が高いが、資料が限定されるため断言はできない。もし、北天平塚古墳・南天平塚古墳の円筒埴輪が3条突帯4段構成の埴輪であったとすれば、中期における桜塚古墳群の埴輪は、直徑・突帯間の間隔・器高・段構成という全体のフォルムが基本的に変化しないということになる。段構成に変更があったとしても、少なくとも大塚古墳以降、底部径・突帯幅・口縫部長の類似した小形の円筒埴輪が桜塚古墳群の首長墳に供給され続けたことは間違いない。

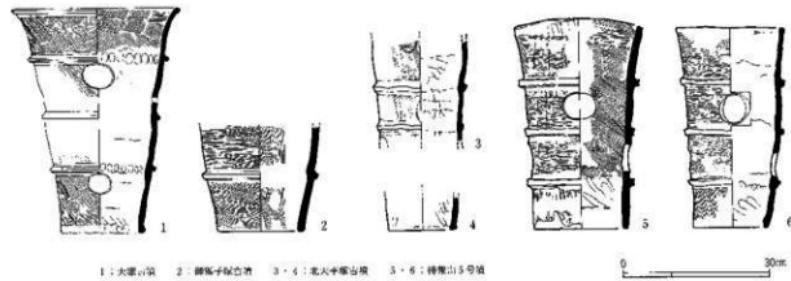


図120 桜塚古墳群における中期の円筒埴輪と待兼山5号墳の円筒埴輪

ただし、全体の規格は類似しているものの、調整技法や焼成は古墳間で大きく異なることが指摘されている(田上1987)。大塚古墳出土埴輪の外面調整にはヨコハケが欠如しており、1次調整のタテハケあるいはナナメハメが施されているにすぎないが、御獅子塚古墳以降の埴輪では静止ヨコハケが施されている。大石塚古墳や小石塚古墳の円筒・初顔形埴輪には断続的なヨコハケが存在するのであるが、そのヨコハケ技法は継承されず、いったん大塚古墳の段階で絶対するのだ。その一方で、御獅子塚古墳以降には静止ヨコハケという新たな技法が導入される。さらに御獅子塚古墳以降では、審磨が導入され無黒斑の埴輪が製作される。南天平塚古墳の埴輪では底部調整が加わる。つまり、底部径や突帯開閉という規格は同じでも、大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳では製作技法が異なるのである。

高橋克寿は、畿内周辺部における古墳時代中期の埴輪生産には、専従の埴輪製作集団がおらず、古墳築造ごとに畿内政権から「人が派遣されて埴輪が製作される」という埴輪生産の復元を行っている(高橋1994)。大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳で埴輪の製作技法が異なる現象は、高橋が復元するような埴輪生産体制であれば理解が容易である。古墳が造られることに、異なる埴輪工人が桜塚の地に訪れて埴輪を製作すれば、異なる製作技法で作られた埴輪が存在してもいっこうに不思議ではないからだ。派遣工人の存在があったかどうかはともかく、新たな製作技法が大王権力の側から素早く桜塚の地にもたらされていたのは間違いない。

**円筒埴輪の縮小化の背景** 製作技法が各古墳で異なるながらも、規格が同じ小形の円筒埴輪が、大塚古墳から導入され始めたことはきわめて興味深い。前述の通り、この時期に猪名川左岸流域において、池田・箕面城と待兼山丘陵域の首長系譜は断絶する。桜塚古墳群内でも、墓城が西部から東部へ移動する。首長墳の墳形も前方後円墳から円墳の大塚古墳へと変化する。つまり、埴輪の縮小化と画一化という現象は、首長系譜の変動と期を一にして起こった現象である。ここに坂のいう「埴輪の規制」なるものを

見て取ることができる。

首長系譜の断絶や首長墳の墳形の変化が大王権力との関係の表示であるとの都出の見解(都出1988)に従うとすれば、大塚古墳で見られた埴輪の縮小化・画一化という現象も、大王権力の関係を示したものと考えても差し支えない。その意味では埴輪の縮小化と画一化は大王権力が主体となって行われたものであるといえる。埴輪製作の技術が大王権力側から伝來したとの想定も、この考えに合致する。

ただし、大塚古墳で起こった墳形の変化や埴輪の縮小化・画一化を、「規制」という概念でのみ表現することには躊躇を覚える。大塚古墳は墳形こそ円墳であり葬石も有しないが、その直径は56m、高さは3.3mを計る。墳丘に用いられた土量からいえば、先代の首長墳である大石塚古墳・小石塚古墳を凌駕し猪名川左岸域で最大級の規模を有するのである<sup>15</sup>。しかも、猪名川左岸における他の2つの首長系譜は断絶しているため、大塚古墳は猪名川左岸域の盟主墳の存在である。

都出の研究によれば、盟主墳の移動は大王権力との関係によって大きく左右される現象である(都出1988)。大塚古墳には最新相の武器と武具が多数刻銘されており、その武器の様相から百舌鳥古墳群と古市古墳群との密接な関係が窺えるという(田中1989)。大塚古墳の被葬者は、百舌鳥古墳群・古市古墳群の勢力つまりは大王権力のテコ依りによって盟主的地位に就いたと考えて良い。大塚古墳の被葬者側からすれば、大王権力を背景に猪名川左岸域を配下に置いたという理解が可能なのである。大王権力側にとっては、大塚古墳被葬者を統括することで権力中枢に近い西摂津を配下に取め、権力の安定を図ることができる。一方的な規制というよりは、大王権力側の地域再編成と新たな中期的身分秩序の策定に大塚古墳被葬者が協力する形で、支配地域を拡大し猪名川左岸流域の盟主墳となった可能性が高い。5世紀代の画一的な甲冑のセットが削除された円墳あるいは帆立貝形古墳の被葬者が、大王権力によって組織された軍事組織の一端を担う人物であるという都出や田中の見解(都出1991:p.31、田中1993a・

b)が認められるとするならば、中期的な身分秩序とは軍事的身分秩序であり、大塚古墳の被葬者は大王権力の軍事の一端を担っていたと考えられる。

大塚古墳の埴輪が円墳であることは、大王権力による規制あるいは大王権力内に大塚古墳の被葬者が取り込まれた表示であろう。その一方で、猪名川左岸最大規模の上量を有する墳丘は猪名川左岸域で勢力を拡大した証ともいえる。大塚古墳で起こった埴輪の変化には、こうした2重の変化が表示されていると考えられる。

埴輪の変化も同様なことがいえるのではないか。円筒埴輪の縮小化という点では、大王権力からの圧力や規制を感じるが、豊富な副葬品とともに導入された多様な形象埴輪は、葬送儀礼に訪れたであろう猪名川流域の他の首長や配下の民衆に大王権力との親縁度を見せつけたであろう。大塚古墳でみることのできる埴輪の変化には、大王権力からの規制だけではなく、2種類の性格を読みとるべきである。待兼山丘陵の古墳から出土した埴輪 前節で、桜塚古墳群における埴輪の縮小化と画一化という現象を指摘し、その背景には大王権力との関係が表示されていると考えた。次に待兼山丘陵の小古墳について考えてみるとことにして。これまでに待兼山3号墳・4号墳・5号墳・石塚古墳から埴輪が出土している。このうち3号墳と4号墳はキャンバス造成により失われ、包含層・造成土から埴輪が出土したことによりその存在が明らかになった古墳である。埴輪規格は不明であるが、立地条件から見て一辺(直径)十数m以下の古墳とされる(福永編1988: pp.19-20)。石塚古墳の実態はほとんど明らかでない。採集されている埴輪も少量であるので今回の考察からは除くことにする。

5号墳の埴輪については本書第II章で示したところである。3条突帯4段構成の円筒埴輪とともに蓋形埴輪や器種不明の形象埴輪片が出土している。円筒埴輪の底部径は15~20cm・突帯間の間隔10.5cm・口縁部長10.5cm・器高は41~43cmである(図120)。

3号墳と4号墳の埴輪で光形の個体はないものの、4号墳の円筒埴輪は報告者である福永伸哉によって

器高40cm程度の3条突帯4段構成であろうと推測されている(福永編1988:p.25)。4号墳の底部径は15~20cm・突帯間の間隔は10.5cmである。

3号墳出土円筒埴輪の底部径は20cmであり、突帯間の間隔は10.5cmである。この底部径からは大形の円筒埴輪を復元することはできない。やはり3条突帯4段構成か4条突帯5段構成の埴輪を想定すべきであろう。4号墳と5号墳の埴輪も3条突帯4段構成の埴輪であると考えられるので、3号墳の円筒埴輪も3条突帯4段構成の埴輪である可能性が最も高いと思われる。3号墳からは軽形埴輪・家形埴輪片が出土しているほか、蓋形埴輪と考えられる破片も出土している。4号墳には形象埴輪は出土しなかったが、円筒埴輪そのものも造成土からの出土があるので、形象埴輪がもとから伴っていなかったのかどうかは不明である。

待兼山丘陵における3古墳の埴輪は、時期的な変化を顕著に示すハケなどの調整技法や突帯の形状を除けば、器高や直徑、さらに突帯間の幅など規模や規格という点では類似する点が多い。

**埴輪の比較** 次に桜塚古墳群の埴輪と待兼山丘陵の小古墳の埴輪を比較することにしよう。残念ながら桜塚古墳群の円筒埴輪には不明な点が多いが、中期以降の桜塚古墳群における埴輪と待兼山丘陵の埴輪には直徑・突帯間隔には顕著な違いは認められない。たとえば、全容の判明する大塚古墳の円筒埴輪は3条突帯4段構成であり、器高44~48cmを計る。この円筒埴輪と待兼山5号墳の円筒埴輪を比較すると、器高・直徑・突帯幅の間隔などの点において、ほとんど差を認めるることはできない。大塚古墳出土円筒埴輪の第1段の高さが待兼山5号墳のそれよりもわずかに高いため、器高差がわずかに認められるにすぎない(図120)。御獅子塚古墳・北天平塚古墳・南天平塚古墳の埴輪も段構成は不明ながらも、公表されている資料から判断すると直徑や突帯間隔は待兼山丘陵の埴輪のそれときわめて類似するのである。もし、御獅子塚古墳の円筒埴輪をはじめ、北天平塚古墳や南天平塚古墳の円筒埴輪も3条突帯4段構成の埴輪であるとすれば、段構成・器高・直徑・突帯

輪などが類似する同規模・同規格の円筒埴輪が桜塚古墳群と待兼山丘陵の小古墳に供給されていることになる。残念ながら今のところ段構成が判明する資料が少ないので、そうした確証はない。しかし、少なくとも直径・突帯幅の類似した小形埴輪が桜塚古墳群と待兼山の小古墳に供給されていることは注意してよい。

形象埴輪においては、待兼山3号墳と5号墳から複数種類の形象埴輪が出土しているものの、大塚古墳・御獅子塚古墳出土形象埴輪の方が種類が多く、精巧な作りの埴輪が多い(表2)。桜塚古墳群と待兼山丘陵の小古墳群では、この点では差異が認められるかもしれない。ただ、大塚古墳と御獅子塚古墳は待兼山3号墳と5号墳よりも時期的に先行する古墳であり、形象埴輪の精粗は時期的差異である可能性もある。待兼山3号墳と5号墳と時期的に相前後して築造される首長墳である北天平原古墳と南天平原古墳の形象埴輪については不明な点が多い。待兼山3号墳の埴輪は包含層、5号墳の調査も限定的なものであるので、形象埴輪の種類もまだ増加する可能性がある。形象埴輪については今後の検討課題とすべきであろう。

以上のように不明な点は多いものの、桜塚古墳群の首長墳と待兼山丘陵の小古墳には、規格の類似する小形円筒埴輪が供給されていることが明らかである。猪名川左岸域においては、馬見古墳群や古市古墳群でみられたような埴輪の大小に対応した埴輪の使い分けはないか、使い分けが存在したとしても顕著な差は認められない。円筒埴輪という器物には、階層差が表示されていないのである。この点は、以下に述べるように、他地域の状況と比べると特徴的な現象である。

#### IV 他地域の盟主墳と小古墳における円筒埴輪

これまでに、畿内周辺では馬見丘陵の古墳群や古市古墳群、久津川古墳群などにおいて、古墳の規模による埴輪の使い分けが指摘されてきている。ここでは、桜塚古墳群のように、古墳時代中期に小形埴

輪が盟主墳に供給されている地域について検討を行いたい。猪名川左岸域の様相と比較することにしよう。

**丹後加悦谷 古墳時代前期の加悦谷には、丹後周指の大前方後円墳である蛭子山古墳が築造され、そこには丹後型埴輪という独特の形をした埴輪が埴丘を巡る。**

しかし、中期になると前方後円墳は作られなくなり、直径54mの円墳である鳴谷東1号墳が登場する。鳴谷東1号墳には丹後型埴輪は用いられず、口縁が直立した3条突帯4段構成の円筒埴輪が用いられる。一方、1号墳の南側には11×7.5mの方墳である3号墳があり、この古墳も埴輪を有する。しかし、3号墳で用いられている埴輪は、1号墳と大きく異なる。2条突帯と3条突帯の円筒埴輪が併存し、直径も器高も1号墳の円筒埴輪よりも小さい。このように、小形埴輪が盟主の首長墳に用いられている地域でも、埴輪の大きさに階層差が表示されている。

さらに重要なことは、1号墳には基本的に丹後型埴輪が認められないことに対し、3号墳には丹後型埴輪が用いられていることである。

まず、鳴谷東1号墳の埴輪には畿内の埴輪製作の影響を見て取ることができる。首長墳における埴形・規格の変化と埴輪の変化が期を一にして起こる現象は、桜塚古墳群と共通する。佐藤亮一は、このような現象から、丹後は5世紀前葉に畿内政権の機構に組み込まれたと推測する(佐藤ほか1993:p.63)。佐藤の指摘通り、埴輪の変化は大王権力主導によっておきたものと思われる。

このように1号墳から丹後型埴輪が拭きされて、3条突帯4段構成の畿内型埴輪が導入される理由は、大王権力の主導によるものと考えることが自然であろう。その一方で、3号墳に丹後型埴輪が残存するという現象からは、大王権力の影響が3号墳にまで及んでいなかった可能性が考えられる。

**中丹波地域** 中丹波には中期中葉に忽然と私市円山古墳が築造される。この古墳は全長81mの造出付円墳であり、中期中葉における中丹波地域の盟主的古墳である。墳頂には3基の埋葬施設を有し、武器・武具を有する。時期は少し下るが豊中大塚古墳と類

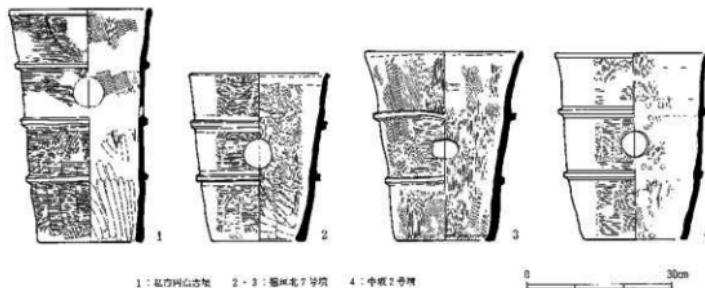


図121 中期における中丹波の円筒埴輪

似する構成である。豊中大塚古墳と同じように3条突帯4段構成の円筒埴輪を有する。豊富な武器が出土することも、豊中大塚古墳と類似し、私市円山古墳も大王勢力の関係を背景に、巨大な墳墓を築造した可能性が高い。3条突帯4段構成の円筒埴輪も豊中大塚古墳と同様に大王勢力の関与のもと製作され、埴丘に樹立されたのであろう。しかし、その周辺に位置する小古墳である福岡北7号墳や中坂2号墳では、2条突帯3段構成の埴輪が用いられる。鍋田勇も指摘する（鍋田1989）ように、ここでは円筒埴輪の大きさに階層差が認められるのである（図121）。問題は階層差を表示する埴輪を創出した主体は何処にあるのかということである。

2条突帯3段構成の埴輪は古市古墳群や百舌鳥古墳群には基本的に認められない（鎌方1999）。このことにより、福岡北7号墳や中坂2号墳の埴輪は大王権力によって規制された埴輪というよりも、私市円山古墳の被葬者との関係を明示するためという地域内事情で、作り出された埴輪ではないかと考えられる<sup>19</sup>。

このように丹波後加悦谷や中丹波では、盟主墳の埴輪が小形であっても、その周囲の小古墳にはさらに小規模な埴輪が使用されていた。つまり、埴輪の大きさに階層差が反映されているのである。盟主墳である鳴鶴東1号墳や私市円山古墳の埴輪は、畿内の関連が強く感じられる。墳形の変化からも明らかなように、豊中大塚古墳と同じく、それらの被葬者は

大王権力の身分秩序と地域再編に組み込まれたことが理解できる。しかし、小古墳の埴輪には畿内の影響を認めることはできない。丹波後加悦谷では丹波後型埴輪が部分的に用いられたり、中丹波では畿内の中坂には存在しない2条突帯3段構成の埴輪が用いられている。この点を評価すると、小古墳の埴輪には大王権力からの直接的な関与ではなく、埴輪の大きさに示された階層差は、地域内の秩序が強く反映されていると考えるべきであろう。

つまり、地域の盟主墳は大王権力側から強い関与を受けるが、盟主墳周辺の小古墳は、大王権力よりはむしろ、その地域における盟主墳の被葬者から直接的に規制が加えられたと考えられるのである。

**長原古墳群** 長原古墳群では、古墳時代中期初頭に直径50m余りの塚ノ本1号墳や一ヶ塚古墳が築造される。塚ノ本1号墳には4条突帯の円筒埴輪も存在するが、3条突帯4段構成の円筒埴輪が主流を占める。一ヶ塚古墳も3条突帯4段構成の円筒埴輪が用いられているようである。その後、顕著な首長墳が作られることはなく、その一方で数百基の方墳が築造されるが、そうした方墳には3条突帯4段構成の埴輪が供給されている<sup>20</sup>。長原古墳群では首長墳から小古墳にいたるまで小形の円筒埴輪を使用しているのである。小規模な方墳は中期中葉以降にその数を増していくようであるが、このことは猪名川左岸域と共に共通点が認められる。

## V 待兼山5号墳における埴輪祭祀受容の背景

中丹波や丹後加悦谷においては、盟主墳の周辺に位置する小古墳には、盟主墳よりもさらに規模の小さい埴輪が供給されていた。そうした小古墳の埴輪には、大王権力の規制や影響よりもむしろ在地酋長勢力の影響が及び、埴輪の規模にはその地域の中の階層関係が反映されていると考えた。

では、待兼山の小古墳はどの勢力によって導かれて埴輪を導入したのであろうか。

前述の通り、待兼山丘陵には前期末葉から中期前葉という古墳の空白期間において中期中葉から古墳築造が再開される。前期後半の待兼山古墳や御神山古墳の実状は不明であり、埴輪を有していたかどうかは不明である。両古墳に埴輪が存在していたとしても、その埴輪生産と埴輪祭祀は少なくとも1世代以上は途絶えていたのである。中期中葉に古墳を新たに築造するにあたり、窯窓焼成に代表される新たな技術の導入は他集団の埴輪工人の援助なくしてはかなわなかつたであろう。また、前期には存在しなかった形象埴輪の導入も待兼山丘陵の小古墳には認められる。そうした新しい製作技術ならびに中期的な埴輪祭祀の導入は待兼山丘陵の小古墳被葬者が自ら導入したと考えるよりも、他集団からの影響ないしは主導によって行われたと考える方が自然である。

待兼山丘陵の小古墳に埴輪祭祀をもたらした集団には2つの候補を考えられよう。1つは、この時期の猪名川左岸域における盟主墳を築山する桜塚古墳群の集団である。桜塚古墳群の首長墳に葬られた盟主的首長がその支配下の小首長あるいは有力家族層に埴輪祭祀をもたらし、埴輪製作の技術を伝えるか、あるいは埴輪を供給したと考えるのである。先に考察したように、中期における桜塚古墳群の埴輪は大王権力の関与のもとで製作されたと考えた。大王権力主導による埴輪祭祀は、桜塚古墳群の勢力が媒介することにより、その配下の小首長に伝えられたと考えるのである。

もう一つは、大王勢力が、桜塚古墳群の勢力を媒介せずに、待兼山丘陵の小首長に直接埴輪祭祀を導

入した可能性が考えられる。

先に示したように桜塚古墳群の首長墳と待兼山丘陵の小古墳にはとともに小形円筒埴輪が樹立されていた。不確定な部分が多いが、同規格の埴輪が供給されている可能性がある。つまり、円筒埴輪の規模には地域内の階層差が表示されていないのである。このあり方は、他地域と大きく異なる。盟主墳に小形埴輪が樹立している地域においても、その周辺の小古墳にはさらに規模の小さい埴輪が供給されることが中期では一般的である。もし桜塚古墳群の集団が待兼山丘陵の埴輪生産に関与しているのであれば、他地域と同じように、地域内の階層秩序を埴輪の規模に反映させるのではないか。待兼山丘陵の小古墳の埴輪が桜塚古墳群の円筒埴輪と類似する規格であることが認められるのであれば、その埴輪の供給には桜塚古墳群と同じく大王権力の関与があったと考えることが自然であろう。

また、猪名川左岸域の埴輪のあり方は、長原古墳群のそれに近い。長原古墳群の小方墳については、弥生時代の方形周溝墓から引き続いた農業共同体の家長層とする石部正志の見解（石部1980）や一般民衆の墓であるとの京鳴覚の見解もあるが（京鳴1997）、大王権力との直接的な関係により、墓の造営が認められたとする見解が有力であると考える（広瀬1984、田中1985、寺沢1985、岸本1989、高橋はか1993）。このことから長原古墳群は大王権力との関係の下、埴輪の樹立を認められたものと考えられる。

長原古墳群との類似性も、待兼山の小古墳における埴輪が大王勢力から直接的にもたらされたという先の推測を指示するものである。埴輪だけではなく、古墳の築造自体も、待兼山丘陵域の小首長が大王権力側から直接的な把握を受けることにより、築造が許容されたのではないかろうか。

**首長系譜の動向と小古墳** さらに注意したいことは、待兼山丘陵に小古墳が築造される中期中葉以降は、桜塚古墳群において首長墳の規模が縮小傾向にあるということである。北天平塚古墳は前方後円墳であるが、御獅子塚古墳よりも規模が小さいと考えられる。

さらに、後続する南天平塚古墳は直径24mの円墳である。桜塚古墳群の首長墳が相対的に規模を縮小する事に反比例するように、待兼山丘陵や利倉南遺跡・蜜池北遺跡で小古墳が築造される（図117）。

桜塚古墳群における首長墳の縮小化は桜塚古墳群を含んだ集団の勢力が衰えていたことを示すものである。桜塚古墳群が勢力を衰退させた理由は、他の猪名川左岸域における集団との関係で、相対的に勢力を衰退させたというよりも、大王権力と関係を結ぶ中で勢力を減退させた可能性が高い。中期中葉から後葉に突出した盟主墳が不在であるという現象は、猪名川左岸のみならず、乙訓地域でも共通した現象であるからだ（齋藤1988）。和田晴吾も自身の古墳編年表を示す中で、このころに各地の首長墳が墳丘を縮小化したり、前方後円墳が廃絶する現象を指摘する。その原因は大王勢力が地域の首長に対する支配を強め、地域首長の勢力を弱体化させた結果であると評価する（和田1987：p.53）。

つまり、古墳時代中期中葉以降に、大王権力は、地域の盟主的首長勢力である桜塚古墳群の勢力に規制を加えつつ、その配下にあった猪名川左岸における小集団の掌握を直接的に行おうと試みたと考えるのである。

## VIまとめ

古墳時代中期に盟主的古墳が築造される桜塚古墳群と待兼山丘陵の小古墳の円筒埴輪を比較した。その結果、桜塚古墳群の盟主的古墳に用いられる埴輪と待兼山丘陵の小古墳に用いられる埴輪はその規模と規格が類似し、不明な点が多いながらも同規格の埴輪が供給されている可能性を指摘した。

この状況は、埴輪の規模に地域内の階層が表示される他地域とは大きく異なる。このことから、待兼山丘陵における小古墳の埴輪は、桜塚古墳群の集団をバイパスして、大王権力から技術の供与あるいは埴輪自体の供給を直接受けたと推測した。このことは埴輪にとどまらず、中期中葉以降における小古墳の築造自体が、大王権力の承認あるいは後押しによって行われたことを意味すると考えた。

待兼山丘陵に代表される小古墳は中期中葉以降に出現し、その数を増すが、その一方で、桜塚古墳群の首長墳は埴輪規模が縮小化する。これは、大王権力側が、地域の盟主的首長勢力である桜塚古墳群の勢力を規制を加えつつ、猪名川左岸の小集団に対して直接的な掌握を行った結果ではないかと推測したのである。ここで注意したいことは、猪名川左岸域と中丹波ならびに丹後における相違である。中丹波と丹後における小古墳は地域の盟主墳との関係が強く現れていることを指摘した。このことは大王権力による地域支配が一様ではなく、各地域の実状にあわせた対応が行われたことを示すものと考える。

そういう意味では、小古墳の出現と消滅、それに伴う埴輪の規格や有無は、大王勢力と地域首長勢力という2つの力が微妙に反映された結果であるといえる。

6世紀前半以降、池田・箕面城に前方後円墳の二子塚古墳が築かれる。盟主的古墳が桜塚古墳群から池田・箕面城に移動するとともに、盟主的古墳の規模が再び大きくなる。盟主的首長の地位が桜塚古墳群の集団から池田・箕面城の集団に移動するとともに、その勢力が拡大したと見るべきだろう。

同じ頃、小古墳は猪名川左岸から再び姿を消す。これは、地域の盟主的首長の勢力が再び強くなつたため、地域内の小集団に大王勢力が関与する動きが阻害され、小古墳の造営が止まつたことを示すのではないかろうか。本地域ではTK43型式期以降においても大規模な群集墳が発達しない。これは当該期においては西日本でも屈指の規模を誇る鉢塚古墳の存在と無関係ではあるまい。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々より助言ならびに資料調査でお世話になりました。記して感謝します。淡田尚子・清水篤・陣内高志・寺前直人・服部聰志・林正彦・柳本照男・農中市教育委員会。

## 注

- (1) 待兼山3号墳は福永編1988においてテニスコート調査地点として報告されている古墳のことである。待兼山4号墳も同じく福永編1988で極限物質センター調査地点で検出された古墳である。

- (2)坂の地輪規制論は、小野山の古墳規制論が一つの根拠となっている。小野山は、古墳規制の主体を大王権力に求めているから、坂も規制の主体は大王権力にあると考えているのかもしれない。
- (3)近年、桜塚古墳群東群において塚原塚古墳が調査された。その結果、大塚古墳よりも時期的に遡る可能性のある地輪が出土したという(清水1994)。その実態は未だ明らかでないので、今回の考察からは除いておく。発掘調査の報告が待たれる。
- (4)大石塚古墳と小石塚古墳は隣接して存在し、埴輪棺は両古墳をとりまくように配置されている。埴輪棺に用いられた埴輪は、大石塚古墳あるいは小石塚古墳のいずれから供給されたかは確定的ではない。
- (5)豊中市教育委員会にて実見した7個体の観察による。
- (6)ただ、部分的に副部怪が30cmを超える円筒埴輪の破片が存在するので、大型の円筒埴輪が存在した可能性がある。その場合でも、そのような個体はきわめて少数であり、主体は底部径18cm程度の小型の円筒埴輪である。
- (7)豊中市教育委員会にて実見した11個体の平均値による。
- (8)石川昇の式によって、大塚古墳の上量体積を計算すると $10,341\text{m}^3$ となる。猪名川左岸域において現存する前方後円墳では、大石塚古墳が $6,395\text{m}^3$ ・小石塚古墳が $1,256\text{m}^3$ ・御獅子原古墳が $3,954\text{m}^3$ ・池田山古墳 $3,381\text{m}^3$ である(石川1989)。
- (9)鍾方正樹によれば3条突帯4段構成の埴輪を円筒埴輪の最小規格として維持する畿内や西日本に対し、東日本では2条突帯3段構成の円筒埴輪が増加するという。東日本のこうした動向は、畿内政権による政治的規制を背景とする現象であると説く(鍾方1999)。この考えは基本的に妥当であると考える。その一方で、鍾方論文には福岡北7号墳や中坂2号墳のような畿内周辺部において2条突帯3段構成の埴輪が導入された契機についてはあまり言及されていない。この2古墳の円筒埴輪についてでは、畿内政権すなわち大王権力とは直接的な関係はないと思われる。円山古墳の配下の小首長が埴輪を用いる時、地域内の序列関係を明示するために円山古墳よりも小さな埴輪が必要とされたため、中丹波独自に誕生された規格の埴

輪であると考えるのである。

- (10)長原40号墳には6条突帯以上の円筒埴輪が少數存在するようであるが、主流は3条突帯4段構成であろう。

## 参考文献

- 石川 昇 1989「前方後円墳築造の研究」六興出版、東京
- 石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社、大阪: pp.370-402
- 大西智和 2000「大隅における埴輪の導入ー北部九州の埴輪導入との関連から」『九州の埴輪その変遷と地域性』九州前方後円墳研究会、宮崎: pp.468-471
- 岡村勝行ほか 1988「小石塚古墳(隣接地) 第2次調査」『島中市埋蔵文化財調査概要』1987年度 豊中市教育委員会、大阪: pp.4-16
- 小野山節 1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会、岡山
- 笠井敏光・吉田珠巳 1992「古市古墳群の埴輪の規格性」『古代文化』第44巻第9号 古代学協会、京都: pp.23-27
- 鐘方正樹 1993「久津川古墳群研究の検討課題」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四十周年記念 関西大学考古学研究室、大阪: pp.215-235
- 鐘方正樹 1997「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内』I 奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊 奈良市教育委員会、奈良: pp.407-417
- 鐘方正樹 1999「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号 墓輪検討会、大阪: pp.109-131
- 岸本 非 2000「九州における窯窯焼成導入以降の埴輪の展開」『九州の埴輪その変遷と地域性』九州前方後円墳研究会、宮崎: pp.393-414
- 岸本道昭 1989「長原古墳群の歴史的意義」『大阪文化財論集』大阪文化財センター、大阪: pp.219-236
- 京嶋 覚 1997「初期群集墳の形態過程ー河内長原古墳群の被葬者をもとめて」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会、京都: pp.213-226
- 佐藤亮一ほか 1993「加悦町のはにわ」加悦町古墳公園はにわ資料館研究報告第1集 加悦町古墳公園はにわ資料館、京都
- 高橋克壽 1994「埴輪牛座の展開」『考古学研究』第41

- 卷第2号 考古学研究会、岡山：pp.27-50
- 高橋 工ほか 1993「葦火」44号 大阪市文化財協会、大阪
- 田上雅則 1987「櫻塚古墳群の円筒埴輪」『攝津豊中大塚古墳』豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会、大阪：pp.150-160
- 田中清美 1985「長原古墳群」『古市古墳群とその周辺』折河泉文庫、大阪：pp.96-106
- 田中晋作 1989「古舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』122号 古代学研究会、大阪：pp.28-50
- 田中晋作 1993a「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について(上)」『古代文化』第45巻第8号 古代学協会、京都：pp.1-9
- 田中晋作 1993b「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について(下)」『古代文化』第45巻第10号 古代学協会、京都：pp.10-19
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の继续と断絶」『待兼山論叢』史学篇22号 大阪大学文学部、大阪：pp.1-16
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説」『日本史研究』343号：pp.5-39
- 寺沢知子 1985「渡来系集団の一族相」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズII、京都：pp.339-355
- 鍋田 勇 1989「私市円山古墳出土の円筒埴輪」『京都府埋蔵文化財情報』第33号 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp.46
- 坂 靖 1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV、京都：pp.187-199
- 坂 靖 1994「奈良県の円筒埴輪」『櫻原・吉川考古学研究所論集』第11 吉川弘文館、東京：pp.329-367
- 広瀬和雄 1984「群集墳研究の源流と方法」『歴史科学』96号 大阪歴史科学協議会、大阪：pp.14-36
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社、東京：pp.24-26
- 指永伸哉編 1988「待兼山遺跡II」大阪大学埋蔵文化財調査委員会、大阪
- 増出逸朗 1987「埼玉政權と埴輪」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集 新人物往来社、東京：pp.401-421
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会、岡山：

pp.44-55

#### 遺跡文献

- 池田茶臼山古墳：墨田 直 1964「池田市茶臼山古墳の研究」池田市文化財調査報告書第1輯 池田市、大阪
- 石冢古墳：福永編 1988、前掲
- 蛭子山古墳：佐藤光一ほか 1992「史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書」加悦町文化財調査報告第15集 加悦町教育委員会、京都
- 人石塚古墳：柳本照男・田中晋作編 1980「史跡人石塚・小石塚古墳」豊中市教育委員会、大阪
- 大塚古墳：豊中市教育委員会編 1987「攝津豊中大塚古墳」豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会、大阪・中村古孝編 1992「攝津豊中古墳第3次調査概要報告書」大塚古墳発掘調査団、大阪
- 御神山古墳：豊中市史編纂委員会 1961「豊中市史 第1巻 豊中市」、大阪：pp.43-47
- 御獅子塚古墳：豊中市教育委員会編 1990「御獅子塚古墳」、大阪・山元 健 1986「御獅子塚古墳調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1985年度 豊中市教育委員会、大阪
- 私市円山古墳：鍋田 勇ほか 1989「(1) 私市円山古墳」『京都府遺跡調査概報』第36回 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp.3-79
- 北天平塚古墳：橋出正徳 1993「第III章 櫻原古墳群第4次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1992年度 豊中市教育委員会、大阪：pp.7-14
- 小石塚古墳：柳本照男・田中晋作編 1980、前掲・岡村勝行ほか 1988、前掲
- 炳三堂古墳：田上雅則編 1992「炳三堂古墳」池田市教育委員会、大阪
- 小塚古墳：清水 章 1995「櫻塚古墳群第5次(SZK-5)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.3 豊中市教育委員会、大阪：p.50
- 桜塚38号墳：清水 章 1994「櫻塚古墳群第3次(SZK-3)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.2 豊中市教育委員会、大阪：p.30
- 桜塚古墳群(第1次)：服部聰志 1992「櫻塚古墳群第1次(SZK-1)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.1 豊中市教育委員会、大阪：p.45
- 桜塚古墳群(第6次)：清水 章 1995「櫻塚古墳群第6次(SZK-6)」『豊中市埋蔵文化財年報』vol.3 豊

- 中市教育委員会、大阪：p.51
- 鳴谷東1号墳：和田晴吾編 1987『鳴谷東1号墳第1次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第1冊、京都・和田晴吾編 1989『鳴谷東1号墳第2次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第2冊、京都
- 鳴谷東3号墳：和田晴吾ほか編 1992『鳴谷東古墳群第3・4次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第4冊、京都
- 新免2号墳：豊中市教育委員会 1989『文化財ニュース豊中』No.11、大阪：p.4
- 善海1号墳：大阪大学考古学研究会 1988『まちかね考古』No.1、大阪
- 利倉南遺跡（第1次）：豊中市教育委員会 1988『文化財ニュース豊中』No.9、大阪：p.5
- 豊中孤塚古墳：豊中市史編纂委員会 1961『豊中市史』第1巻 豊中市、大阪：pp.60
- 中坂2号墳：黒田恭正・杉本 宏 1983『中坂古墳群・他』『丹波の古墳』I 山城考古学研究会、京都：pp.109-118
- 長岡40号墳：高井龍司 1990『温班をもつ円筒埴輪の一例』『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』II 大阪市文化財協会、大阪：pp.285-310
- 新稻古墳：大阪大学考古学研究会 1990『まちかね考古』No.3、大阪
- 福垣北古墳群：田代 弘 1988『福垣北古墳群』『京都府埋蔵文化財情報』第30号 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp.29-32・田代 弘 1989『福垣北古墳群』『京都府遺跡調査概報』第36冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp.88-91
- 二子塚古墳：田上雅則 1987『池田市埋蔵文化財発掘調査概報』1986年度 池田市教育委員会、大阪
- 萱池北遺跡（第17次）：服部聰志 1994『萱池北（宮ノ前）遺跡第17次（HIK-17）』『豊中市埋蔵文化財年報』vol.2 豊中市教育委員会：p.77
- 待兼山古墳：豊中市史編纂委員会 1961 前掲：pp.43-47
- 待兼山3号墳：福永伸哉編 1998、前掲
- 待兼山4号墳：福永伸哉編 1988、前掲
- 待兼山5号墳：本書
- 南天平塚古墳：柳本照男・清水篤 1992『南天平塚古墳第2次』『豊中市埋蔵文化財年報』vol.1 豊中市教育委員会、大阪：p.96
- 嫁廻冢古墳：清水 篤 1994『桜塚古墳第3次（SZK-1-3）』『豊中市埋蔵文化財年報』vol.2 豊中市教育委員会、大阪：p.50

#### 挿図出典

- 図118：柳本・田中編1980、図119：西村ほか1988、図120-1：豊中市教育委員会編1987、図120-2：山元1986、図120-3・4：橋田1993、図121-1：橋田1989、図121-2：田代1989、図121-3：田代1988、図121-4：黒田・杉本1983より再トレス。

## V 総括

## V 総括

Ⅲ医療技術短期大学跡地における埋蔵文化財の試掘調査の報告を行った。個々の調査の詳細はすでに述べたとおりであり、検出した遺構と遺物の評価についても不十分ながら記したところである。本調査の目的がⅢ医療技術短期大学跡地利用計画を策定するための事前調査であるので、以下ではⅢ医療技術短期大学跡地における埋蔵文化財の遺存状況に焦点を絞って記載を進めることとしよう。

Ⅲ医療技術短期大学跡地においては全体として埋蔵文化財の密度は高い。その中で待兼山遺跡が弥生時代から中世までの複合遺跡であることが明らかに確認された。特に第2調査地点南半・第3調査地点・第9調査地点では多くの遺物とともに遺構が検出されている。このエリアを開発する際には、正式な本調査が必要である。特に第2調査地点で確認された待兼山5号墳は周溝の遺存状況が良好であり、埋葬施設も遺存している可能性が高い。浜津地域では、良好に保存されている小形古墳はきわめて珍しい存在である。今後の開発計画においては保存を前提とした立案が望ましいと考える。

このほかにも、第1調査地点・第6調査地点北端・第8調査地点・第10調査地点ではトレンチ内から遺構こそ検出されなかったものの遺物が出土している。この範囲においても、開発の際には原則として本調査が必要と考える。

一方Ⅲ医療技術短期大学の建物があった部分は、Ⅲ地形が大きく改変され、遺跡がかつてあったとしても失われている場所も多い。第4調査地点・第5調査地点・第6調査地点の平坦面・第7調査地点・第13調査地点南半は地形の改変が著しく、遺構と遺物が存在する可能性は低いと言えよう。

今回の第1期試掘調査では、丘陵尾根上をほとんど調査していないが、斜面部堆積層の遺物包含状況から判断すると、古墳や集落などの遺跡中心部が尾根上に存在している可能性が高い。とくに第15地点と第16地点ならばにその周辺に位置する地点からは、多くの遺物がこれまでに採集あるいは出土している。

実際に現地を踏査すると、造成による地形改変を被った様子は認められない。古墳と思われる不自然な高まりも散見される。第2調査地点で見つかった待兼山5号墳が単体で存在しているとは考えにくく、待兼山丘陵には多くの古墳が築かれていたに違いない。旧地形の改変を受けていない第15・16地点には古墳をはじめとして多くの遺構が遺存していると考えた方がよい。第13調査地点はその南半部の調査においては、造成の結果、旧地形は失われていることが判明している。しかし、第8調査地点ならばにガス整地機建設時の試掘調査で中世の土器片が出土している。これらの土器は地形から見て第13調査地点より流出したものであると考えられる。第13調査地点にはかつて中世集落が営まれていた可能性が高い。

なお、Ⅲ医療技術短期大学跡地で出土した遺物は遺存状況がよいものが多い。中でも特に待兼山5号墳出土の円筒埴輪と第9調査地点の土器棺はほぼ完形に復元できた。古墳時代中期の埴輪や奈良時代の土器棺は、完形品は概律ではきわめて少ないのが現状である。研究に利用されることはあるが、地域の歴史資料として有効に活用されることが望まれる。

次にⅢ医療技術短期大学跡地以外の石橋団地内で行われた試掘調査と立合調査について簡単にまとめおきたい。第Ⅲ章で示したとおり、石橋団地はキャンバス造成時に大幅な地形の改変を受けているところが多い。しかし、そうした中でもラフオーレ食堂横の駐車場建設工事試掘調査では、地下2.5mもの深さから、弥生土器あるいは埴輪と考えられる土器片が出土した。Ⅲ地形に手を加えず造成土を盛った場合、このように深いところに遺跡が保存されているケースがあるので、地形の改変が著しい場所でも注意を怠ることはできない。

このように石橋団地内には弥生時代から中世までの多岐にわたる遺跡が存在する。こうした貴重な文化財が無為に破壊されることがないように、建設計画には今後とも配慮が必要である。

(清家)

【報告書抄録】

ふりがな	まちかねやまいせき3				
書名	待兼山遺跡III				
副書名	大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	大阪大学埋蔵文化財調査室（編者：清家 章）				
発行機関	大阪大学埋蔵文化財調査委員会				
所在地	大阪府吹田市山田丘1-1				
所取遺跡名	所 在 地				コード
					市町村 遺跡番号
待兼山遺跡	大阪府豊中市待兼山町				27208
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34°48'17"	135°27'11"	980309~010331		建築計画の立案	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
待兼山遺跡	古集 墳落	弥生時代 古墳時代 祭祀時代	古土器 墳棺	埴輪・土師器 七器棺	新古墳の確認

待兼山遺跡 III

大阪大学旧医療技術短期大学跡地試掘調査報告

2001年4月発行

編集 大阪大学埋蔵文化財調査室

発行 大阪大学埋蔵文化財調査委員会

(委員長 肥塚 隆)

〒567-1 大阪府吹田市山田丘1-1

印刷 (株) 真陽社